

神様は裏切らない

〔詩編 119 編 113～117、129～136 節（アルファベットによる詩）〕
心の分かれている者をわたしは憎みます。あなたの律法を愛します。
あなたはわたしの隠れが、わたしの盾 御言葉をわたしは待ち望みます。
悪事を謀る者よ、わたしを離れよ。わたしはわたしの神の戒めを守る。
あなたの仰せによりすがらせ 命を得させてください。
わたしの望みを裏切らないでください。
わたしを支えてください そうすればわたしは救われます。いつもあなたの掟に目を注ぎます。

あなたの定めは驚くべきものです。わたしの魂はそれを守ります。
御言葉が開かれると光が射し出で 無知な者にも理解を与えます。
わたしは口を大きく開き、渴望しています。あなたの戒めを慕い求めます。
御顔をわたしに向け、憐れんでください 御名を愛する者への裁きに従って。
仰せのとおり わたしの足どりを確かなものにしてください。どのような悪もわたしを支配しませんように。
虐げる者からわたしを解き放ってください。わたしはあなたの命令を守ります。
御顔の光をあなたの僕の上に輝かせてください。あなたの掟を教えてください。
わたしの目は川のように涙を流しています。人々があなたの律法を守らないからです。

〔1〕 神は人格を持って語りかけられる

10月から旧約聖書・「詩編」をご一緒に味わってきました。今日は6回目になります。今日で一区切りをつけさせて頂きたいと思います。と言いますのは、来週は上原一晃神学生をお迎えし、宣教をして下さいます。その次の週は「子ども祝福式」の礼拝となります。そうするともうその次はアドベント（待降節）に入るのです。ですから今日が一区切りということになります。ただ、丁度締め括りとしては相応しい詩編を読むように導かれているようにも思います。

「詩編 119 編」ですが、これは詩編の中でもとび抜けて長い詩編です。全 176 節。あの詩編 23 編のように暗唱は出来なんでしょう。ご覧頂くと分かるように、各セクションごとに「アレフ」「ベト」「ギメル」…となっていますが、これ

はヘブライ語のアルファベット順で、「いろはにほへと」のカルタのように初めの文字がその順になっているんです。一種の遊び心ですが、そのようにして覚えることをしていたのだと思います。ユダヤ人たちはそのようにして、主の律法を覚えることを教育されていました。それは頭の知識と言うよりは、文字通り肌身離さず「**神の言葉と共に生きる**」ということを大事なことでしていたということです。はたして私たちは信仰者としてそれほど神様の言葉そのものを大事に生きているだろうかどうだろうかと思います。

この詩編 119 編の中で一体何度出て来ているか、共通した言葉があります。—「**律法**」、「**掟**」、「**仰せ**」、「**戒め**」、「**命令**」、「**定め**」、「**御言葉**」という言葉です。詩人は心からそれを慕い求めています。これは特に「**律法**」「**掟**」などは「**トーラー**」と言われるものです。今丁度**レビ記**を祈祷会では読んでいますけれども、あれは殆ど全部が神様がモーセを通して語られた「**律法**」(トーラー)なのです。あなたは生ける神様によって奴隷の家から救い出された、神様に愛されている存在なのだ、そうであれば、神様の言葉に従って生活して行きなさい。それがあなたの幸いとなる、ということだと思います。神様は、**偶像とは違う**のです。ご人格を持って私たちに語って下さる。それは**冷たい文字**ではなく、**血が通った「言葉」**なのです。その中心であるトーラーは、色々なバリエーションで語られ、この詩編 119 編は、その神様の言葉への愛と信頼で満ちています。例えば 97 節では「わたしはあなたの律法をどれほど愛していることでしょう。わたしは絶え間なくそれに心を砕いています。あなたの戒めはわたしを敵よりも知恵ある者とします」とか、有名な言葉の一つとしては 105 節に「**あなたの御言葉は、わたしの道の光 わたしの歩みを照らす灯**」とあります。今日の中でも 135 節に「**御顔の光をあなたの僕の上に輝かせてください。あなたの掟を教えてください。**」と、主の掟に従う決断が語られています。詩編 119 編は、そのような**神様と詩人の心の対話**といったものが、連綿と、まるで美しい織物のように綴り合わされているようなのです。

[2] ストレス多い人生の中でみ言葉を待ち望む

しかし、この詩人は、今**ストレス**の多い環境に晒されているのですね。115 節の「**悪事を謀る者**」とか 122 節の「**虐げる者**」がこの詩人を脅かしているのですね。私たちもあると思います。彼は何であんなことを言うのだろう、どうして無視をするような態度を取るのだろうというようなこと。心がドキドキして布団を被ったままでいたくなるようなこと。しかしそのような中で、この詩人は神様の許に身を置き、**み言葉を待ち望んで**います。現実には息苦しくても、自分の中に閉じ籠るのではなくて、自分の霊を外へと導いてくれるもの、それが**神様の仰せ**であり、**命令**であり、**み言葉**なのだ、と歌っていると思います。**ブルッゲマン**という旧約

学者は『詩編を祈る』こという本の中でのようなことを書いています。—「中心であるトーラーによって、信仰を深め神を知るための第一の道は服従だということのを思い起こします。これらのユダヤ人の祈りは、トーラーは命令するだけでなく保証するものであり、規制するだけでなく防護してくれるものであることに気づいて、そのことを喜び祝っています」と。

114 節ではハッキリと「**あなたはわたしの隠れが、わたしの盾 御言葉をわたしは待ち望みます**」(川越教会の今年度の聖句です)と言っています。私たちは“隠れが”を必要とする者ですよ。そしてその後の 116 節では「**あなたの仰せによりすがらせ 命を得させてください。わたしの望みを裏切らないでください。**」と言っています。切実な訴えです。私はこれは、この詩人がもちろん不安な気持ちもあってそのような訴えをしているのだと思いますが、“私はあなたの仰せによりすがります、ですから私を裏切ることをしないで下さい”という、**神様の言葉に全部自分を投げかけている深い信頼**があるようにも思うのです。本当に絶望している時、人は祈る心も失ってしまうのではないかと思います。ですから、**祈れるということそれ自体が素晴らしい**と思うのです。イエス様も、私たちに「**戸を叩き続けなさい**」と、「**あきらめないで祈る**」ことを教えて下さいましたよね。あの哲学者のキルケゴールは、「**死に至る病とは絶望だ**」と言いましたけれども、本当にそうではないでしょうか。**神様に向かって祈る、それ自体がもう希望**なのです。訴える相手がいる、いて下さるということですから。よく、「辛いことがあった時は独りで抱え込まないで」と言いますが、本当に**神様は私たちを独りぼっちにはさせない方**だと思うのです。それが、神様が「語りかけられる神」ということだと思うのです。

[3] 罪人の私たちへの「光あれ」

創世記を思い起こして下さい。この世界が創造された時、神様は、ご自身の「言葉」をお用いになってこの世界万物を造られたということを知っていたと思うのです。**私たちの存在より先に、神様の言葉があった**のです。創世記 1 章 3 節にこうあります。「**神は言われた。『光あれ』。こうして光があった。**」これは太陽のことではありません。それ以前の根源的な光です。それ以前は闇が覆っていたと言います。闇しかない世界…。想像してもしきれないですね。しきれなくて当然です。人間は、神様が光を創造し、その後、人間が生きることが出来るように全てが整えられた後に造られたのですから。**初めから私たちを生かそうとされる神様のみ心、愛**があるのです。けれどもその後人間は、「神の言葉」に背いて、樂園にすることが出来なくなってしまいました。**墮罪**ですね。しかしこれで光が全くなかったわけではなく、まだこの世界という舞台は消えていません。立ち帰ることが出来るように、神様はどれだけ愛の手で人間を引き戻そうとされてきたか。旧約聖

書の歴史はその歴史です。アブラハム、ヤコブ、ヨセフ、モーセ、預言者たちを通して、神様は語って来られました。そしてついに神様は、決定的な「神の言葉」を私たちに送られました。それが主イエス・キリストですよね。このことも、私たちが神様にお願いしたからではなく、神様の方が先手を取って下さったその出来事です。先ほど「招きの聖句」として読んで頂いた言葉をもう一度お読みしたいと思います。

「実にキリストは、わたしたちがまだ弱かったころ、定められた時に、不信心な者のために死んでくださった。正しい人のために死ぬ者はほとんどいません。善い人のために命を惜しまない者ならいるかもしれませんが。しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました。」(ローマの信徒への手紙 5:6~8)。

今日はこの主イエスの愛を私たちの心に刻む「主の晩餐式」も行います。あの出来事も、正に神の言葉です。弟子たちもあの時何が行われているのか、またその言葉の本当の意味は分からなかったでしょう。しかし、後で分かったのです。今日の御言葉がそれをよく示していると思います。「御言葉が開かれると光が射し出で 無知な者にも理解を与えます。」(119:130)。神様の霊である聖霊が光をもって私たちの心を照らして下さり、「アーメン」と言わせて下さいます。信仰生活は「アーメン」、「主よ、あなたの仰せのとおりです」と繰り返し言わせて頂くことの連続ではないでしょうか。

神様が出来ないことがあるとすれば、それは、人を愛することを止めるということなのだと思います。事実、神様は最近の言葉で言うならば、人間のことが好きすぎて、イエス様を私たちの所にお送り下さったのです。神様は人間を愛すると言ったなら、どこまでも責任を取るお方なのです。私たちは、神様を裏切るかもしれないそんな罪人ですけれども、神様は私たちから決して離れず、私たちへの愛を貫徹されます！「わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示された」のです。

この旧約の詩編の中にも、私たちは主イエス様の憐みの大きさ、またこの方に絶えず立ち帰ってゆく信仰の幸いをも見せて頂いていると思います。この詩編の言葉を私たちの祈りとさせて頂きましょう。

お祈り致します。